

翼を持つ石像の分布

— 一石三十三観音の石像から —
 || (石仏のイコノロジー⑬) ||

(I) はじめに・信濃と奥三河・キリシタンとの関わり

北設楽には子供を抱く地藏や観音が多い。初めに石仏に興味を持ったときの印象である。しかも十字架を持つている。これが、石仏から花祭の問題を探ろうとしていたときのことである。石仏に関心を持ち、石仏と十字架の組み合わせに異質さを論じたが、十字架は石工の技量による錫杖の変形では無いかと言われた。だが、今では十字架は石工の意識的なものだと考えている。豊田市稲武の瑞龍寺の石像(図①)、碧南市宝珠寺の翼を持つ観音像(図②)の存在があるが、その像をキリスト教信徒の精神的拠り所でもある天使と解するからである。石仏などを彫る石工は、一般的に無教養だとされているが、(仏教的な)儀軌に沿う形でキリシタンの表現を試みていたと考えている。

翼を持つ石像の分布



図②碧南市宝珠寺 翼と天衣を有する <77x27>



図①エンジェル型石像・豊田市稲武町瑞龍寺 <38x17>

特に碧南市宝珠寺の観音の天衣の意匠(図③)は東板橋区の乗蓮寺にある石像と似ている。違いは、「翼」の有無である。つまり、宝珠寺の像には「翼」と「天衣」が彫られているが、乗蓮寺のものには「翼」はない。問題は、「天衣」を翼に見立てさせていることである。碧南市の像には翼も天衣も有ることから初期のものと考えている。この天衣を翼に見せる工夫は各地の石像にも見ることが出来る。例えば、図④の岡崎市千方町、図⑤長野県豊科町の天衣であり、さらに図⑥の伊那市光久寺と図⑦の愚溪寺の蝶形の羽は天衣から「翼」への過渡期に当たり、稲武・瑞龍寺の石像の「翼」と、同時期のものと見ている。翼と天衣を結びつける理由は神戸市美術館の『ザビエル像』(図⑧)の天使像にある。『ザビエル像』には三人の天使が描かれているが、その天使の翼は首の辺りから出ている。肖像画はザビエルが日本滞在の(天文十八【1549】年)二十一年【1551】のものと考え、作者は日本人と見られている。つまり、ザビエルが天文十九年夏に鹿児島に上陸し、二十年十一月にゴアに向かうまでのものとなる。この首に翼を持つ天使は、後の天草四郎の陣中旗(「綸子地著色聖体秘蹟図指物」(天草キリシタン館所蔵))の天使と比較すれば天使像の理解が進んでいる。陣中旗は島原の乱に

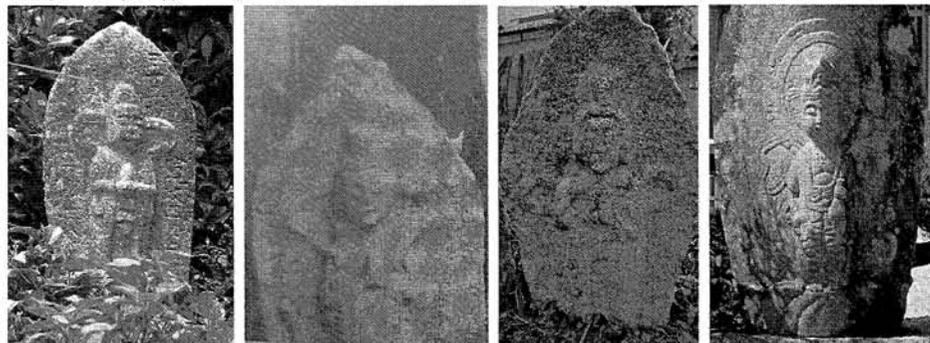
春日井 眞 英



図③乗蓮寺の観音像天衣が翼

翼を持つ石像の分布

用いられたから、寛永十四(1637)年である。天使の姿は、ザビエルの画から85年でキリスト教の教えが浸透したと言える。この陣中旗には中央にカリス(聖杯)と、十字架のあるホスチア(聖体)を拜む二人の天使が描かれることで、天使像の理解は進んでいると言える。この翼をキリシタンと識られないように工夫したのが、石工であり、彼らに関わっていたのがキリスト教に関心を有した僧侶達であろう。このことは後でも触れるが、僧侶等の関与によって石仏は飛天と天使が融合できたと考えている。ここから、巷の石像の意匠が問題になる。基本的にはマリアに見立てられる聖観音には天衣は不要であるが、中には天衣を纏うものもある。子供を抱く観音は天衣を纏わない。さらにマタイ伝・ルカ伝の話を彷彿とさせる石仏や、木喰の立木仏等が問題となる。



図④(左)千万町の観音、図⑤(中)豊科町石造文化財p86より。田沢中村・虚空蔵堂の観音。図⑥(右)伊那市・光久寺の観音・天衣の位置の高さに注目したい。図⑦(右端)御嵩・愚溪寺の観音、蝶の羽に似せている。

ある。稲武は尾張、三河から塩を信州にもたらす中馬街道の要衝にある。それ故に各地からの商人や、物資の移動は大きく、また碧南も衣浦湾に面した湊であったことから各地の物資や、人が集った。この碧南の宝珠寺の翼と天衣を有する石像の背景に尾張藩のキリシタン政策を考えている。横山住雄はその著作で尾張のキリシタンについて次のように記している。

寛永十六(1639)年に犬山城下にキリシタン禁制令の札が立てられ。寛文元(1661)年の濃尾崩れでは熱田円通寺の孤舟和尚らが邪宗を広めたとして篠島に流されている。

碧南の繁栄の時代背景にこのような思想弾圧を押し返そうとしたエネルギーが、翼と天衣を有した石像を出現させたと考えている。その時期は寛文初期〜中期の頃と考えている。それは尾張藩が寛文七(1667)年の十二月にキリシタン検挙終了を幕府に報告していることにもよる。

ところで、稲武は湾岸部から信州への中継地であり、尾張から、中山道の恵那、東海道の三州吉田(豊橋)とも繋がる。そして伊那谷はオルガンテイノ神父から受洗した京極マリアの(聖体)の関係でキリシタンとの関わりは強く、次男・京極高知は義父毛利秀頼の遺領を継ぎ文禄三年(1594)信濃飯田の城主となり、翌年に高遠城で洗礼を受けたという。この伊那谷は秀吉のとき尾張清洲を治めた福島正則とも縁が



図⑨天草四郎陣中旗・天草キリシタン館 寛永14(1637)年

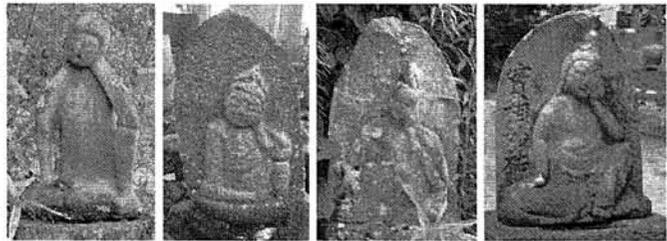


図⑧ザビエルの十字架の先に天使・神戸市立美術館

ある。清洲ではキリシタン保護政策を取り、関ヶ原の後、安芸広島藩49万石を得るが、武家諸法度違反を問われ、信濃国川中島4万5千石に減封される。ここでの福島のキリシタン政策は不詳だが、彼の墓地のある岩松院や、小布施界限には逆手の思惟観音、双体仏が多い。この逆手の思惟観音とは、通常は右手が頬に触れるのに対して、左手が頬に触れている。この型の観音像は処によっては歯痛観音とも呼ばれ、軽井沢、小布施、飯田、足助、知多半島などでも見ることが出来る。双体仏については稿を改める。

ところで、碧南の天衣と翼を持つ観音像であるが、その背景に伊那の石工との交流が考えられる。西海賢二は石像のさまざまな意匠が行者、聖などを介して伝わったとしているが、そのことは、各地の石像の意匠からも理解できる。ただ、年代を確定できない。特に千手観音、十一面観音の手の彫られ方は興味深い。ただ庚申は阿修羅像のように肩辺りから手が彫られ、観音像とは異なる。図⑭、⑮は守谷貞治の石像で江戸後期になるが、図⑯の御嵩の愚溪寺、根羽村の一心寺は時代は遡るだろう。北斎の天井絵の天使像図⑱にはキリシタンの影響があるだろう。この天使像を建福寺(高遠)の千手観音の手に翼を重ねてると考えれば高遠石工の守屋貞治は北斎の影響を受けたことになるかも知れない。伊那周辺の石仏は十字架を持つだけでは無く、巧みに翼を隠しているものも有る(図⑲、⑳)。

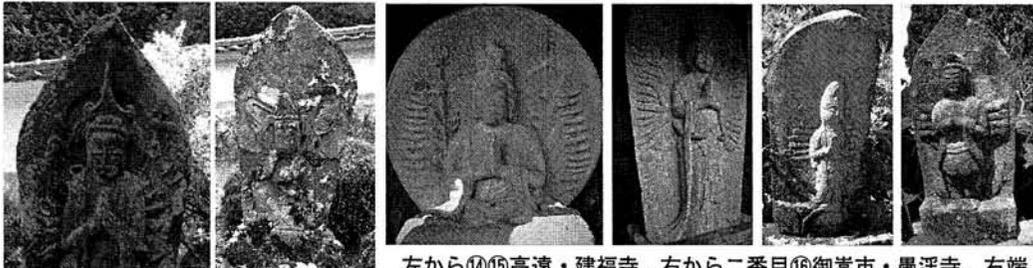
翼を持つ石像の分布



左から⑩逆手の思惟観音・別名歯痛観音・泉洞寺・軽井沢・62×36
⑪小布施・六川・龍雲寺(42×23)⑫豊田市足助界限・ニタ宮町⑬東浦・越境寺

ところで北斎は93回も転居をしているが荒井勉は、これを北斎の「周縁性」「非正常性」と見、彼が「無縁界」にいた証と見ている。このことは石工と根底で通じよう。北斎と守屋貞治の接点は不明だが、北斎が江戸を離れ、小布施で天使像を描く事は反権力的と言える。それは守谷に限らず石工達が故郷を離れ御禁制の十字架を彫ることに通じ、禁制に挑むことで周縁的な世界に追われたことが十字架を持つ石仏、逆手の思惟観音(准胝観音)など仏教の儀軌に沿わないものを江戸時代中期頃生む背景となったかも知れない。

小布施の岩松寺に寒念仏供養の碑(宝暦八年1758)がある。そこにT字型の十字架がある。これは念仏供養の撞木かも知れないが、荒井はこれを十字架と見、須坂の穴観音、寿泉院周辺の宗教施設から、福島正則と隠れキリシタンの関係を考えている。ただ、彼の見た供養塔は元文五(1740)年のもので、筆者の見たものより18年古い。この種の念仏供養碑、寒念仏供養碑は各地に見るが、



左から⑭⑮高遠・建福寺。右から二番目⑯御嵩市・愚溪寺、右端⑰根羽村、一心寺。これらは手が腰辺りから掘られ、光背様の手が翼に見える。建福寺のものは守谷貞治作とされ、江戸後期。愚溪寺、一心寺は年代不明だが、江戸中期か。



図20 佐野美術館（三島市）「着衣鬼図」



撞木あるいはT字型の印を持つものは少ない。
 天使を描いた北斎は岩松院に「大鳳凰図」（小は東町屋台天井。中は須坂寿泉院の観音堂の天井画）を納めている。鳳凰は「聖天子の出現するときに、世に現れる」瑞獸（瑞鳥と『詩経』「春秋左氏伝」「論語」と知るならば、福島正則に対する北斎の思いが判る。さらに八九歳のころ北斎が描いた「鬼図」（図20）は興味深い。図には、僧衣を着た鬼の前に酒徳利と刺身の皿があり、この皿に箸が二本、交差して描かれている。荒井は、これを十字架と見酒徳利に隠されている数珠を十字架に繋がるロザリオと見立てている。だが、「鬼図」の僧衣、生臭物、酒のもつ暗

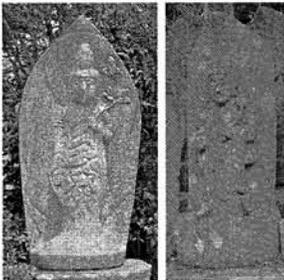


図21北斎のエンジェル。図=22豊橋岩屋の観音、花が二段になっている。右端図=23は与良木峠、蓮は蕾。

示性には触れていない。筆者は、他に北斎の天使が持つ花に注目している。この花は蓮に似ているが、花の首元に葉があり、蓮に似て蓮ではない。花を持つ石仏は主に観音だが、蕾状の蓮である。石仏には枝分かれした花、満開の花を持つものも見るが、別稿にしたい。

石仏と「翼」の問題にもどる。ここまで寄り道したのは石仏が持つ翼が宗教弾圧の抵抗を示す象徴と見るからである。このことが、反権力的な姿勢を示していることは、寛文元年（濃尾崩れの年）に名古屋熱田の円通寺の孤舟和尚らが邪宗を広めたとして篠島に流された理由と考えるからである。仏教の世界にキリスト教の要素の例として筆者は石仏の腰にあるリボン状の帯を考えている（図24）。それは天衣の一部と見られるリボン状のものだが、その姿は多様である。このリボンを持つ観音像は各地にある。



図24馬頭観音・リボン・天衣・大輪地区・愛郷・44×22

吉田藩主松平忠利の日記（寛永八〔1631〕年十二月二十六日の条）には「クリシタン久太夫を「火焙りにいたし候」と記している。パジェスもこの年に尾張と名古屋で九人、（中略）三河に五人、御油に五人、吉田に二人、牛久保に一人、マルヤマ（○丸山へママ）に一人、千々岩（ママ）に二人の殉教者がたととしていた。ここにクリシタンの移動があったことは否定できない。彼らが海（平戸）に向かっていたのか、信濃かは不明だが、彼らが捕縛されたのが本街道でないことは興味深い。それは彼らを手引きする存在の可能性を示すが、目的地は判らない。この街道の周辺については、多様な石仏などから北設楽地方を「宗教的サンクチュアリ」と捉えておきたい。

(II) 愛知高原の石仏に見る翼
 ……★羽布・熊野神社の三十三観音……

ここから愛知高原の一石三十三観音と、「翼」を持つ像を見て行く。
 一石三十三観音には、舟形光背形の石と角柱に三十三体の観音像が彫られたものがある。舟形光背の観音像は羽布から、桜形、井沢、岡崎市千万町に、角柱のも



図25 豊田市羽布・全体像

のは新城、東栄町にある。羽布の石像(図25)は全高138cm巾52cmの石で六段に分かれ、そこに三十三体の観音像がある。その最上部に瑞雲と飛天が彫られ、その下に三尊がある。この三尊の左端には「翼」がある。この三尊の下に六体の像が各段に六体づつ併せて三十三体彫られている。像は一体が高さ13cm、巾8cmだが、風化している。最上部には七つの瑞雲に囲まれた三観音があり、瑞雲の間には陽と月が見え、雲は見る角度によって飛天にも見える。最上部の三尊(図26)は、他地区の三尊との検討が必要であろう。左端は立像で合掌するが、背中の「翼」がよく判る。中央は蓮(?)を持つことから聖観音。右端は右手で頬杖をつく思惟観音である。この観音群には翼を持つものが十一体ある。気になるのは図27で、角が見え、手にするものが蓮華か、棍棒(金剛杵)の判別がつかない。仮に金剛杵とすれば、「執金剛神」(ヴァジラパーニ)となり、三十三観音の世界は異質のパンテオンになる。



図26 羽布の石像・最上部の三尊・左端の像に翼。中央の者が手にするのは弘子(豊尾)?蓮の花

翼を持つ石像の分布

三十三観音像は愛知高原の岡崎付近の桜形、井沢、羽布、千万町に集中し、信州への入口と見える。各地の三十三観音をつなぐと、三河湾沿岸から信州への古い交易ルートになる。三河湾岸から本宿、清崎を経て新野に向かう、この道筋が岡崎、足助を経ない事は今後の課題である。

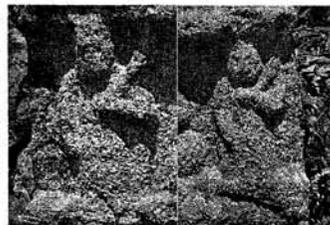


図27 第三段左の執金剛神?角がある。第六段右端のもの手にするのは豊尾?華か棍棒か。

豊田市羽布は足助から東の鳳来寺へ向かう鳳来寺道の南にある。足助から鳳来寺へ向い、阿蔵(12キロ)を南下(5キロ)すると羽布であり、ほぼ半日で行ける。足助から設楽町四谷(清崎)までは約27キロだが、これは阿蔵、三都橋から田峯を抜ける道である。三河湾側から辿ると、三河三谷から本宿は12キロ。そして桜形の専念寺は17キロで約30キロになり、ほぼ一日の行程となる。専念寺から、井沢までは4キロ弱で、四谷までの距離は変わらない。



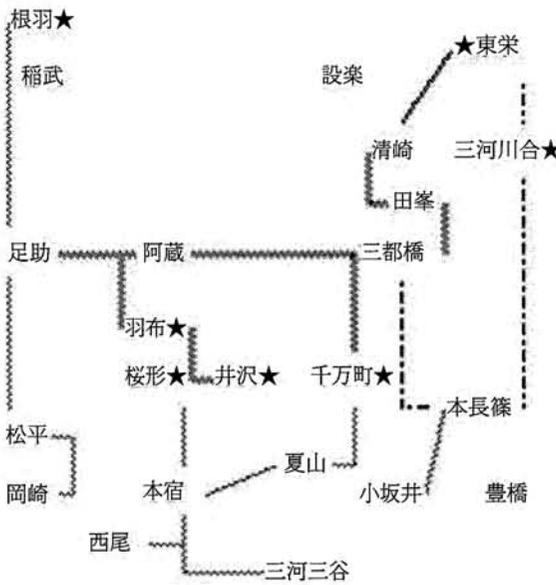
図28 羽布の石像第2, 3段。右、二段目の三体、三段目右端、一体おいて翼を持つ。左端のものが執金剛神?棍棒か豊尾か、翼が右肩に見える。

三河湾の西尾、高浜、一色、そして三河三谷界限から、本宿經由で夏山、千万町、または桜形、千万町へは35、45キロになる。この距離の差は出発点と、目的地による。三十三観音間の最短距離を探すと古道が現れ、そこに寺や寺跡(廃寺)が重なる。ここに、古道が想定でき、その間の距離は約40、45キロである。これは二川宿本陣資料館が江戸時代の旅人は一日に30、40キロ歩くとしていたことによる。この距離は平地でのことだが、山道を行く者に適応できるかは不明だが、参考にする。当然のことだが荷物を運ぶ人々の一日の行程先では、彼らの休養場所が問題と

翼を持つ石像の分布

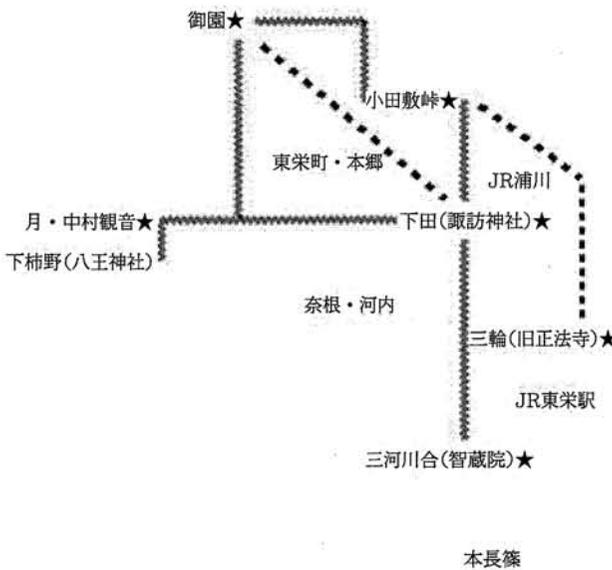
なる。距離から考えて古道脇の寺などを彼らの休養拠点と見たい。荷を運ぶことは、農閑期の賃稼ぎだったかも知れないが、社会状況の中で本職化したと見ている。彼らが本百姓でなければ、自由度はあったであろう。そのことが彼らを周縁の世界に向かわせる。また彼らの世話をしていた者達も、移動しながら要素要素で拠点を形成し、役人達の詮索を避けながら住み着いていったであろう。この物資を送る荷主が、荷を運ぶ者達の目標として庚申や、三十三観音を設け、そこに故郷を追われた人間が集まった可能性もある。この背景には荷主、荷受人らの問題がある。この三十三観音や庚申像の他に、鯖魚が、初期キリスト教の象徴イクトウスと見ればキリスト教との関わりが伺える（静岡県の水窪にはヤマメを抱く観音がある）。また、そういう彼らの世話を

三河高原・羽布・桜形周辺
★があるのは三十三観音のある地点



参照A足助・稲武から羽布・清崎

東栄町の三十三観音
★があるのは三十三観音のある地点



参考B・東栄町界隈の 位置関係

していた人達を繋いだのが出稼ぎの石工達かも知れない。荷運び人達を受け入れる空間は、ジーンズの言う日常的な付き合いの外側にいる異人らを迎える場所でもあった。

三河湾から信濃への道は、愛知高原だけでなく、豊川水系も考えなくてはならない。それは清崎(設楽町)を飯田への中継地と見ることにある。この清崎は本長篠からは18キロ、本長篠は、三ヶ日から23キロ。また細江の関所を避けて金指、引佐では22キロにすぎない。問題は、水路と陸路の利便性だが、荷受人の確保を考えれば三河三谷(小坂井)本長篠の方が安定する。また三河湾を北上する本宿、桜形、千万町から清崎の道はリスクは少なかったか、荷受人かの問題であり、ここ

にキリシタン弾圧を避けた尾張、清洲の商人との関係を考えたい。

ところで本宿には問題となる石仏は見つからなかったが、東海道の宿場町として当然かも知れない。だが街道から離れた安城界隈では子安地藏を祀る地域が多い。その理由を『安城の石仏』は浄土真宗に結びつけているが、それだけでは説明できない。

……★専念寺の三十三観音……

さて、羽布の南、約10キロにある桜形の専念寺の三十三観音像には宝暦九年(1759)の銘がある。しかし装飾はない。羽布、



図29 専念寺の観音

千万町と井沢には瑞雲と飛天の飾りがあるが、専念寺にはない。これは石工の違いか石材の大きさ(羽布135、千万町110、井沢98、専念寺102cm)に依るのかは判らない。だが、上段には三尊が十一面観音・聖観音・思惟観音であることに注目したい。殊に、この十一面観音の手は翼に見える。千万町の上段の像は問題があるので深く触れないでおく。北設楽郡東栄町の小田敷峠の上段の三体は立像であり、座像の思惟観音はない。三河川の智蔵院は三体とも十一面観音だが、右端が座像である。しかも三尊に翼がある。翼を持つ石像は羽布、専念寺、井沢、千万町で見える。ただ、千万町のは最上段が五尊で六尊にも見える、四層に七体ずつの像が彫られ、三十三観音であるが、他とは異なっている。十一体に翼が見られる。



図30 専念寺。最上段の三尊・十一面観音、聖観音、思惟観音。宝暦九(1759)年。

翼を持つ石像の分布

……★井沢の観音像(庚申堂脇)……

この桜形の東、4キロが井沢である。観音像は庚申堂脇にある。この庚申堂から、山に入る道があったという。本宿からは額田の夏山、華藏寺から北上すれば桜形を通らずに着け、夏山から千万町郷家へは11キロになる。井沢を北上すれば13キロで羽布になり、羽布(千万町は約10キロ。井沢から千万町へは東に8キロで、この地区の観音像は全て徒歩二(三時間圏内)にある。井沢の観音像は風化して判りにくいが上部に礼拝する二体の飛天があり、その間に三尊がある。三尊の左は合掌する十一面観音で、翼は不明瞭だがある。中央は華を持つ聖観音だが、華は枝分かれしている。右端は座像で思惟観音である。これは羽布、専念寺と同じ三尊構図だが、飛天の姿は独特である。井沢の観音像では九体が翼を有している。

……★光福寺の三十三観音(千万町町)……

井沢から東、8キロに光福寺跡地(千万町郷家)がある。その野仏の中に観音像がある。光福寺(弘福寺とも記す)は、文政の頃(1818~1831)山崩れで埋まったと言う。この三十三観音には安永三年(1774)の銘がある。観音像の上部には飛天が彫られ羽布に似て瑞雲、飛天は特徴的である。翼を持つ

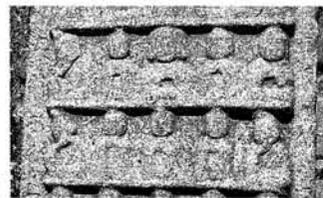


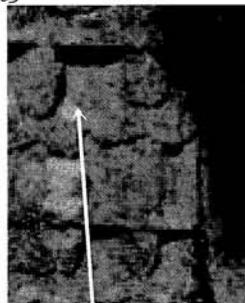
図31 専念寺・第3段の左・4段の右、翼がある。



図32 井沢・最上段には脇に飛天、三尊、二段目両脇端は翼を有する。

翼を持つ石像の分布

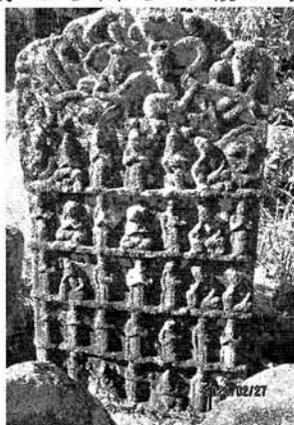
観音像は専念寺、羽布の熊野神社、光福寺に見ることができが「翼」を比較するだけでも興味深い。特に羽布には浄土宗西山深草派の説教所があったといひ、安政四年(1858)の銘を持つ名号石には慈本、徳住(字体からは徳本)の名号がある。堂は伊勢湾台風で崩壊した。



図③井沢、第二段目右端・翼

(Ⅲ) 愛知高原北部・東栄町の三十三観音

ここまで愛知高原の三十三観音を概説したが、千万町から次にこの種の観音が現れるのは、東に約60キロ離れた三河川合の智蔵院になる。智蔵院は別所街道に接し、千万町からは二日ほどの行程になる。ここでの観音像は角柱の蓮華状の龕の中に一体宛彫られている。この龕の中に観音像を彫る形式は、他にもあるが三十三体が彫られたものは岐阜県中津川市上金と恵那市串原にある(愛知高原の北西部)。ただ三十三観音像は北設楽郡東栄町に六体あり、四体は角柱、一体は舟形光背である。



図④千万町町・弘福寺跡の観音110cm安永三(1774)年

年代順に観音像を並べてみる(愛知高原のものも含めておく)

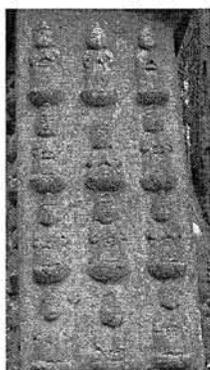
- ①享保五年(1720)《角柱》小田敷峠・東栄町西園目
- ②宝暦九年専念寺(1759)(一石)岡崎市桜形

- ③宝暦十一年(1761)《角柱》智蔵院・新城市川合
- ④明和四年(1767)《角柱》旧正法寺跡・東栄町三輪明和四年(1767)(一石)中村観音・東栄町月(清平寺)
- ⑤安永三年(1774)(一石)旧光福寺・千万町町
- ⑥天明二年(1782)《角柱》観音堂・東栄町下田(諏訪神社)
- ⑦文化十三年(1816)《角柱》御園・東栄町御園久保
- ⑧年代不明八角柱V八王神社・東栄町下柿野(公民館前)年代不明熊野神社・(一石)・豊田市羽布年代不明庚申堂脇・(一石)・岡崎市井沢



図⑤光福寺石仏の上部・裝飾部分に飛天が二人と、雲間にも飛天が認められる。飛天の下に五尊、七尊が四層である。

体、そして左に10体という構造である。またこの観音像には、翼を有するものが見えない(言い方を変えれば十一面観音がない)。このことは、享保五(1720)年の小田敷峠から39年後の宝暦九(1759)年の岡崎の専念寺の39年の間に翼をもつ観音像が生まれたことにな



図⑥小田敷峠十二体が三面にある。正面

つまり小田敷峠の観音像が最古となる。だが、小田敷は東栄の町から離れた山中にあり、この地の持つ意味が興味深い。ここは三河川合の智蔵院、東栄町三輪の旧正法寺から見ても不思議なところである。さらに、小田敷峠の観音は不思議な彫られ方をしている。それは一つ一つの像の左に番号が振られていることである。重複する番号もあり、不思議である。一番は角柱左の十体の中にある。観音像は正面に12体、右に11

柿野は年代不明だが、翼の形から年代を推定は可能である。

★新城・智蔵院の観音について

智蔵院は本長篠から北15キロにある。ここは乳岩への入り口であり、宇連川を上れば設楽町神田に繋がる。この北、7キロに東栄町三輪の旧正法寺の観音があり、三輪から小田敷峠へは浦川經由で15キロ。だが奈根から山越すれば下田でも15キロである。小田敷峠の



図37 三河川合・智蔵院・正面の一部

観音と智蔵院では享保五(1720)年と宝暦十一(1761)年で41年の差がある。この時間差は本長篠から北上する別所街道に、商業的な利点が少ないからかも知れない。智蔵院の観音は小田敷よりも四十年新しく、次は三輪、月、下田となり、御園は下田よりも34年遅くなる。

智蔵院の観音は一体ずつ蓮の花弁状の龕に彫られ(図37)、各段に三体ずつ、正面に十二体、右に九体、そして左側に十二体(12・9・12)ある。これは小田敷(図36)の(12・11・10)とも違う。小田敷峠の像に翼を持つものはなかったが、智蔵院では十三体が翼を有している。この十一面観音の背面の手をクロス・モーリン風の風車の十字架と見るのである。

(詳しくは高田茂の、『聖母マリア観音』)高田に従えば十一面観音の手は全てクロス・モーリンと見ることができよう。この小田敷に近いのが5キ



図36 東栄町下田の観音堂(左)

翼を持つ石像の分布

ロ西の下田の諏訪神社の観音像である。この像は各面に十一体(3・4・4)(図38)が彫られ、その二十二体に翼を見ることが出来る。

★八王神社(柿野)と中村の観音(月)について

智蔵院からは下田にも、三ツ瀬經由で柿野の八王神社、月へも行ける。柿野の八王神社の観音像は角柱で三面に十一体が(2・3・3・3)の四層に彫られている。翼を持つのは正面の七体、右面の六体、左面の三体(計十六体)である。

これまで触れなかったが、各観音像の近くには庚申像があった。柿野の庚申像は貞享四(1688)年の銘を持ち、観音よりも古い。東栄町最古の庚申碑は天和(1688)年間という。地内の庚申像は総数33体(未詳10体)、貞享年間(1684)は9体、元禄(1688)3体、宝永(1704)は1体の庚申がある。このことは庚申の方が、小田敷峠の観音、享保5年(1720年)よりも32年古く、庚申と観音の間わりが問題となる。

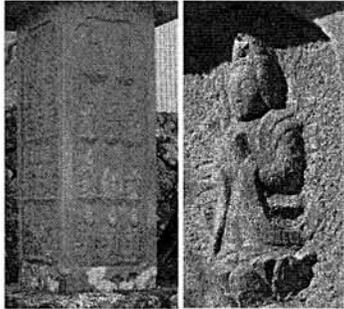


図39 柿野・八王神社の観音・正面・右側。右図40右側の背に翼状彫り物を持つもの

中村観音の上部には蕨手の彫り物がある。また三尊の両脇に梵字バン



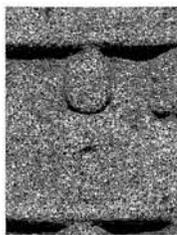
図41 中村観音・最上部・蕨手のレリーフ梵字はバン?(大日如来)とキーク(千手観音)

翼を持つ石像の分布

(大日如来)とキリク(千手観音)図①がある。中村観音(明和四(一七二〇))は上部に三尊(十二面観音・聖観音・思惟観音)があり、その下の六層に五体の三十体がある。翼は十五体に認められる。この観音像の翼は羽布・桜形・千万町と同じ「翼」の形である。

★像に彫られた翼(羽)を考える

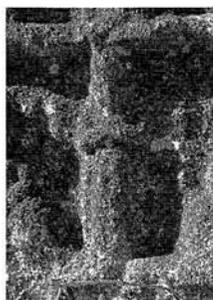
今回、三河高原の一石三十三観音の翼を持つ像に注目したが、観音像が「翼」を持つ意味は何であろうか、天使的なものと見れば、隠れキリシタンとの関わりは否定できない。十一面観音の脇の手を筆者は翼と見立てているが、異論はあるだろう。しかし、図②、③を見れば「翼」であることは明白である。六体の首から腕にかけてストラー状の彫り物も問題になる。また、これほど具体的ではないが、伊那市、美濃太田や可児市にも翼型の天衣を纏う石像がある。特に美濃太田や可児市は濃尾崩れで多くのキリシタンが処刑されたことは忘れてはならない。石像の天衣が蝶の形に彫られていることは注目すべきである。特に、可児市の愚溪寺にはそのような観音像が多いことは、生き残



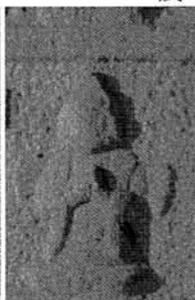
図④⑤ 専念寺・岡崎
桜形・第三段宝
曆九(1759)年



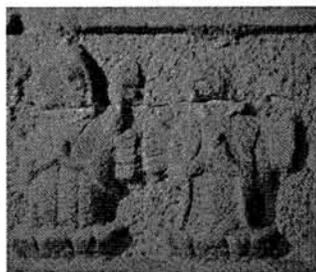
図④⑥ 羽布・豊田
市・最上段・左
年代不明



図④⑦ 左・光福寺・岡崎
市千万町安永三
(1774)年・図④⑧ 右・中村観音・東栄町
月・明和四(1767)年



り身を隠したキリシタンの意思表示と考えている。寛文七年の検査終了(濃尾崩れの結末)が幕府に報告された四四年後の正徳元(1711)年に700名余のキリシタンが捕縛されたことが、尾張部のキリシタンの存在を示している。



図④⑨ 中村観音・左は十一面観音か？二尊とも翼があると言える。意図的な作り方であると言える。

++++++註++++++

★註① 拙論：『石仏幻想の路―三信遠にキリシタン文化を探して―』『言語・文学・文化』第14号(通巻73号) 東海学園大学 <2014>、「石仏に見る隠された背景」『東海仏教』第60輯 平成27年 東海印度学仏教学会 2015など

★註② 若杉慧『野の佛』平凡社2016』所収12、13番 上天弥勒仏(板橋乗蓮寺)として載せているが、『石佛の運命』目耳社 昭和四十八年(1973)のグラビアの6番も同じである。

★註③ (拙論：「木喰の立木仏・子安観音・子安地藏から考える」『言語・文学・文化』第19号通巻78号東海学園 令和2(2020)年) 拙論「東海地方に見る隠れキリシタンの痕跡」『東海仏教』東海印度学仏教学会 第63輯 平成三十(2018)年 北斎の有翼天使像は長野県小布施 北斎館収蔵の上町屋台の天井画にある。

★註④ 横山住雄『尾張と美濃のキリシタン』中日出版社 昭和54年(1979) 291―294p

★註⑤ 浅井久政の娘と伝わるが、実名は不明。娘の童子は秀吉の側室となったことから、キリシタン禁制下でも大目に見られていたという。

次男高知は豊臣秀吉に仕え、羽柴性を許され、文禄2年(1593年)、義父毛利秀頼の遺領を(秀頼の妻子秀秋を差し置いて)任され、信濃飯田城主として6万石を領し、従四位下侍從に任ぜられた。また、領内にキリスト教の布教を許可し、自身もキリシタンとなる。

★註⑥ 福尾猛市郎、藤本篤『福島正則―最後の戦国武将』中公新書(1999) 155～157p

★註⑦ 西海賢一『念仏行者と地域社会―民衆の中の徳本上人―』大河書房 2008 14p

★註⑧ 荒井勉『北斎の隠し絵 ―晩年の肉筆画への執念を解く―』AA出版 1989

荒井が注目した視点は北斎の社会における立ち位置である。荒井は北斎が社会の周縁に生きた人物と見ている。これは逆に見るならばキリシタンとしての意識を周囲に漏らさないように生きたことを暗示する。彼にはシーボルトとの関わりも在ったという。

★註⑨ 山口昌男『文化と両義性』岩波書店 1975。『知の祝祭―文化における中心と周縁』青土社 1977。山口は中心に位置する権力者と周縁部に追われた人々のことを扱い、権力側は異質な人々を共同体の周縁に追いやろうとするとしている。つまり権力に迎合しない「無縁もの」と呼ばれる人々の排除である。「無縁」については、網野善彦は『無縁・公界・衆』平凡社1978で「文学・芸能・美術・宗教等々、人の魂を揺るがす文化は、みなこの『無縁』の場に生まれ、『無縁』の人々によって担われている」という。そういう視点で見ると馬匹輸送に関わる者達は周縁と周縁とを繋ぐ役割を担っていたことになる。

★註⑩ 荒井勉・前掲書 184頁

★註⑪ 静岡県三島の佐野美術館蔵 紙本着色「着衣鬼図」(嘉永元年・1848) 北斎八九歳のものとある。荒井勉は前掲書 104頁

★註⑫ 横山住雄 横山住雄『尾張と美濃のキリシタン』中日出版社昭和54年(1979) 293p 『正事記』の他265pには

翼を持つ石像の分布

寛文元年二月二十二比馬嶋蔵南坊(後の明眼院) 住職篠島配流

々 四月十九日熱田円通寺 孤舟 々々

々 十二月二十八日清洲神明社神主加藤宮内 遠島 (視聽実記

四) 鶴舞中央図書館

とあり、尾張藩内の重臣武家とキリシタンとの関わりを覗う記述がある。

★註⑬ 『よはしの歴史』豊橋市「吉田藩主松平忠利の日記(寛永八年十二月二十六日の条)」101p 1996

★註⑭ 『日本吉利支丹宗門史』(下) 岩波文庫 1983 (第10刷) (1940) 201p 註四。寛永8年の条(1631)にある。

★註⑮ 拙論 「石の仏に見る隠された顔―見立てという視点から考える―」(石仏のイコノロジー⑩)『言語・文学・文化』第18号(通巻七十七号) 東海学園大学「平成31年(2019)。

★註⑯ 西海賢治『念仏行者と地域社会―民衆の中の徳本上人―大河書房2008 5頁)。彼らとともに石工の中には道標、目標として石仏を造っていただけではなく、石仏造立の必要性を説き(註 前掲書 西

海 15頁)、点と点、物と物、物と人、人と物を繋ぐ役割を担っていた、としている。

★註⑰ 安城の歴史を学ぶ会 『安城の石仏』昭和54年(1979)』

★註⑱ 高田茂『聖母マリア観音』立教出版会 昭和四十七年(1952) 第11図 187頁で言うクロス・モーション風の風車と見立てる。

★註⑲ 『東栄の石仏』編・東栄町文化財審議会石仏編集委員会 86頁 昭和54年